

NIESレターふくしま

12
2019



Event Report

国立環境研究所出前講座・三島町町民講座 奥会津地域における適切な森林管理と防災・減災

令和元年10月26日（土）に三島町交流センター山びこにて、第3回目となる「国立環境研究所出前講座・三島町町民講座」を開催しました。前回までの出前講座では森林資源とエネルギーをテーマとしてきましたが、今回はタイトルを「奥会津地域における適切な森林管理と防災・減災」とし、山に囲まれた地域である三島町、ひいては奥会津地域において適切に森林を管理することが、いかに防災や減災につながるのか、ということを中心として研究の進捗について町民の方に報告し、またパネルディスカッションを通して意見交換を行いました。

■ | 開 催 | 概 | 要 | ■

開催日	令和元年10月26日（土）
会場	三島町交流センター山びこ
開催時間	14:00～16:00（受付13:30～）
参加費	無料（事前申込不要）
主催	国立環境研究所・三島町
後援	福島県、環境省 福島地方環境事務所、奥会津五町村活性化協議会、只見川電源流域振興協議会



福島大学
川越 清樹 教授

研究紹介では国立環境研究所の研究内容だけでなく、三島町にて共同研究を進めている福島大学の川越清樹教授にお越しいただき、三島町における土砂災害リスクについて講演いただきました。川越教授は、山深い中山間地域である三島町・奥会津地域では今ある自然の財産を有効に使用できるだけ防災につながる「グリーンインフラ」の展開の必要性について強調されていました。

そのほか、会場から発表者に対しての意見や質問も多く挙がり、参加された方々の関心の高さが伺えました。

適切な森林管理は防災の面だけでなく、景観の整備や森林資源の活用など様々な付加価値を含む取組みです。只見町から参加された方に「自分の町にも足をのばしてほしい」という意見もいただきました。今後は三島町で行った取組みをモデルとし、奥会津全域で広域的に発展させていく必要があると考えています。



「災害で発生したごみはどこに行くの？」

福島支部 汚染廃棄物管理研究室 特別研究員 中村公亮

自然災害によるごみの発生

東日本大震災の発災から、早くも8年9ヶ月が経ちました。この間にも、地震・大雨・台風等の自然災害が日本各地を襲い、最近では台風19号に伴う水害により、多くの方々が被災されました。災害後に問題になるもののひとつが、災害廃棄物（災害ごみ）です。災害後の復旧や復興のために、道路や住居に散乱したごみを片付けたもの、壊れた住居を解体してできた瓦礫等は、災害廃棄物となります。災害後の報道で、空き地、公園、学校の校庭等に集められた、災害廃棄物の山を目にするものもあるかと思いますが、しかし、そうした山も、時間と共になくなります。では、そうした災害廃棄物はどこに行ったのでしょうか。

災害ごみの行方

災害廃棄物はまず、自治体の運営する「一次仮置場」に運ばれます。ここに一時的に集積することで、被災した自治体に災害廃棄物をすぐ処理できる廃棄物処理施設がなくても、片付けや解体等を進められるようになります。一次仮置場は公園、グラウンド等の公有地から選ばれます。災害廃棄物は、一次仮置場に搬入の時点で可能な限り粗選別され、機械や人の手によりさらに粗選別されます。粗選別は、以後の処理を円滑にするとともに、混入した生ごみ等からの悪臭や、発熱による火災を防ぐためです。

災害廃棄物が大量で、被災地の中間処理施設でも、全国の廃棄物処理施設を活用する「広域処理」でも処理しきれない場合、「二次仮置場」が作られます。二次仮置場には仮設の中間処理設備が置かれるため、港湾や工業用地など、数ヘクタールの土地を必要としま

す。ここで災害廃棄物は破碎、細選別、焼却等の中間処理を施され、処理・処分先に運搬されます。

処理・処分先では、災害廃棄物は種類に応じて処理され、中間処理、再資源化、最終処分がなされます。再資源化できない災害廃棄物のうち、可燃物は燃やされ、生じた灰は最終処分場に埋め立てられます。金属はその多くが再資源化されます。コンクリートくず等は、公共工事で再生砕石等として地面に埋めて使われたりします。

福島支部のかかわり

災害廃棄物は、災害の起きる場所や規模、種類などにより、量も質も大きく変化します。私たちは、災害廃棄物の処理を円滑に進めることができるようにするため、災害があれば実際に災害廃棄物や災害の現場を調べたり、自治体の取り組みを支援したりすることによって知見を蓄え、今後の災害に備える研究を進めています。

参考文献

- (1) [環境省 \(2019年11月25日アクセス\) 平成23年3月東日本大震災 災害廃棄物対策の流れ](#)
- (2) [環境省 \(2019年11月25日アクセス\) 災害廃棄物処理の再生利用について](#)
- (3) [環境省 \(2019\) 仮置場の分類](#)
- (4) [環境省 \(2019年11月25日アクセス\) 災害廃棄物対策フォトチャンネル](#)

より専門的に知りたい人はこちら

- (1) [環境省 \(2014\) 災害廃棄物対策指針](#)

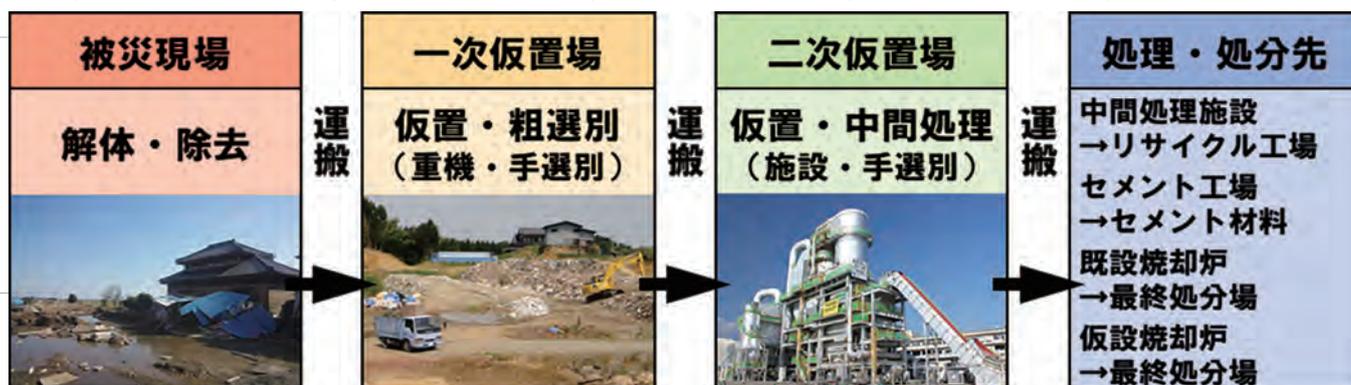


図1 被災現場で発生した災害廃棄物が処理・処分されるまでの流れ

被災地の社会を調べるフィールドワーク

福島支部 地域環境創生研究室 研究員 辻岳史

はじめに

国立環境研究所福島支部の研究者は、川や森の中に含まれる放射性セシウムを測定したり、被災地の生き物の動きや数を調べたりするために、現場を訪れてデータをとる「フィールドワーク」を行っています。実はこの方法は、自然環境や生き物を調べるためだけでなく、被災地の社会を調べるためにも使われます。私たちは、環境に配慮した復興まちづくりに向けた研究を進めるなかで、被災地の社会を調べるために、フィールドワークを行っています。

災害前の地域社会を調べる

災害研究では「復興は、災害にあう前から始まっている」と言われています（中須 2009）。この観点から、私たちは被災地におけるフィールドワークにおいて、災害前の地域の環境や社会に関するデータを集める必要があると考えています。具体的には、災害前に被災地で発行された文書や資料（市町村の行政計画、議会・地区の広報紙、地方紙の記事など）を集めます。これらの資料から災害前の地域づくりの争点、政策や事業、地域づくりに携わる組織や担い手などのデータを集めます。たとえば、筆者が福島県三春町を事例として実施している震災後の地域社会における放射性物質対策に関する研究では、除染活動の中核を担った住民組織「まちづくり協会」の震災前の活動状況を明らかにするために、震災前にまちづくり協会が発行した広報誌を収集・分析しました（写真1）。また、災害前から被災地に住んでいた方から手記（日記や回想録など）や写真をお預かりすることもあります。

次に、これらの資料から災害前の地域社会に関する年表をつくります。年表は縦軸を時間、横軸を活動主体（行政・地域団体など）として集めた情報を整理することで、災害前の地域づくりに係る政策・活動の過程と、地域づくりに携わる組織や担い手の協力・対立関係を記述します。

被災地の復興の動きを調べる

被災地の復興の動きを調べるためには、現地における文書・資料などの収集だけでなく、「観察」や「聞き取り調査」も行います。観察はその名の通り、被災地の人々の生活や復興に向けた活動を見たり聞いたりすることです。例えば、被災地の復興過程においては、様々な協議会や審議会が開かれます。私たちはこれらの会議に参加し、参加者の構成や発言などの様々な情報をメモに記録します。

聞き取り調査は、自治体職員や地域団体の代表など、現場で復興政策や復興活動に携わる方々を対象に、会話形式で行います。この調査では主に、復興政策や復興活動の経緯や、組織や団体の連携のあり方、現場の方々の志向や意識に関する情報を集めます。ここで重要なのは、復興に関わる基本的な事実（いつ、何が起こったのか）について、公開済の文書・資料をもとに年表を作成するなどして、あらかじめ整理しておくことです。先に作成した災害前の年表に追記すると、災害前後の地域の動きをつなげて理解しやすく、効果的です。この作業を怠ると、基本的事実の確認に多くの時間をとられ、調査でしか得られない情報を得る時間が削られてしまいます。

最後になりますが被災地におけるフィールドワークにおいて最も重要なことは、現場の方々の事情や心情に配慮して調査を進めることです。フィールドワークは被災地に介入する営みであり、少なからず現場の方々に負担を強めます。そのため、少しでも現場の協力者の方々の負担が少なくなるようにするだけでなく、調査で得た情報をメモや平易な内容の報告書にまとめて、これらを被災地の方々のまちづくり活動に関する基礎資料として活用していただけるよう努めています。

参考文献

- (1) 中須正 (2009) 復興は、災害にあう前から始まっている, 都市環境, 100(12), 86-92.
- (2) 辻岳史・中村省吾・多島良・大場真 (2018) 地域社会の放射性物質対策におけるステークホルダー連携——福島県三春町を事例として, 第4回震災問題研究会研究会報告書, 4: 55-55.

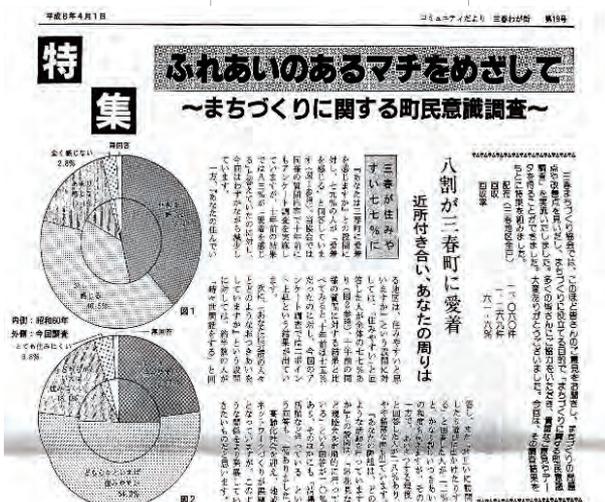


写真1 福島県三春町の住民組織（三春まちづくり協会）による町民意識調査の結果を報じる広報誌の記事（三春まちづくり協会『三春わが街』第19号・1996年4月1日）

最近の動向

10月 October

21日

飯舘村出前講座 2019 ～「までい」な暮らしを支える環境のいま～第1回を開催しました。

26日

三島町出前講座「奥会津地域における適切な森林管理と防災・減災」を三島町にて開催しました。

30日
～
31日

ふくしま再生可能エネルギー産業フェア（REIF ふくしま）2019に地域環境創生研究室がブース出展し、環境創生研究の成果を発信しました。



▲過去最大の216企業団体が出展したREIF ふくしま2019。3Dプロジェクションマッピングなどの体験型プログラムを展示し、取り組みを知っていただきました（10/30・31）

11月 November

3日

三春町秋祭りに出展しました。▶ PICK UP EVENT

20日

飯舘村出前講座 2019 ～「までい」な暮らしを支える環境のいま～第2回を開催しました。

28日

郡山市立郡山第六中学校にて出張講座を行いました。3年生を対象に、放射線に関わる研究内容について説明しました。



▲「水辺の生物と放射性セシウムの動き」講義の様子（11/28）

その他、郡山市自治会連合会の皆さま（10/3）、福井県原子力平和利用協議会の皆さま（10/9）、ウクライナ環境・天然資源省立入禁止区域管理庁副長官（10/17）、ドイツ ザーベック町ギド気候変動部長（11/12）、放射線教育懇談会の皆さま（11/27）、こおりやま広域圏気候変動適応等推進研究会の皆さま（11/29）が視察・見学に来られました。

PICK UP EVENT

三春秋まつり

11/3

福島支部が所在する三春町で毎年開催される三春秋まつりにブース出展しました。生きたゲンゴロウなどの水生昆虫に触れられるコーナーや三春町で採取された昆虫の標本を展示しました。大人から子供まで楽しんでいただき、町民の方と交流する機会となりました。



国立環境研究所福島支部ニュースレター 2019年12月号
発刊日 令和元年12月13日（偶数月隔月刊行）

編集・発行 国立環境研究所 福島支部
〒963-7700
福島県田村郡三春町深作10-2
TEL：0247-61-6561

E-MAIL：fukushima-po@nies.go.jp

ホームページ <http://www.nies.go.jp/fukushima/>



ホームページ



ホームページでは過去のNIESレターふくしまも読めるよ



ACCESS MAP